就実大学教育学部初等教育学科

令和６年度

卒　業　研　究

題　目

身近ないのちを大切にする心を育む保育

－たんぽぽを教材とした自然への興味付けを通して－

学籍番号　5121046

氏　　名　冨 岡 未 来

指導教員　福 井 広 和

身近ないのちを大切にする心を育む保育

ーたんぽぽを教材とした自然への興味付けを通してー

冨岡 未来

目次

第１章　序論

１．動機１

２．背景.....２

（１）原体験の重要性

（２）保育者の働きかけが子どもに及ぼす影響

（３）原体験が減少している原因

３．研究仮説.....５

第２章　文献調査

１．幼稚園教育要領における位置づけ.....６

２．環境教育資料における位置づけ.....８

３．学問的背景.....９

（１）いのちを大切にすることと自然との関わり

（２）幼児の死生観の形成に影響を与える要因

４．死生観の発達段階.....１２

（１）アニミズムの出現

（２）アニミズム思想の捉え方の違い

５．先行事例.....１４

（１）しろいろ森のようちえんでのボランティア

（２）実習園でのボランティア

（３）掲示物を作成する意味.....１７

①文献調査

②現場の保育者へのインタビュー調査

第３章　教材研究

１．いのちを大切にする保育の構想.....２１
２．掲示物の試作
（１）たんぽぽの掲示物.....２４
（２）クイズに関する教材研究.....２６
３．掲示物を活かした保育実践の検討
たんぽぽのドライフラワーの作り方.....２９
たんぽぽのドライフラワーの変化.....３０

第４章　授業実践

１．目的および研究仮説.....３２
２．調査方法と内容.....３３
３．保育実践.....３４
（１）保育実践の様子①.....３５
考察①.....３６
（２）保育実践の様子②.....３９
考察②.....４０
（３）保育実践の様子③.....４１
考察③.....４４
（４）保育実践の様子④.....４６
考察④.....４７

第５章　まとめ

【引用・参考文献】.....４９

第１章　序論

１．　動機

本論文は「身近ないのちを大切にする心を育む保育」を主題としている。私がこの研究に取り組もうと思った理由は、幼少期に身近ないのちを大切にすることを身に付けるということは大人になってからの人格形成において重要であるからである。こども園にボランティアで行った際ある３歳の子どもが桜の木の下で落ちている花びらは集めても良いが、木になっている花びらは取ってはいけないと教えてくれた。このやり取りから、この子どもには植物をいのちあるものとして大切にするという考え方が身に付いていると感じた。また、このように保育者や保護者の考え方が子どもの考え方に直接影響を与える場合があるため保育者の関わり方も子どもの身近ないのちを大切にする心を育むために必要な要因の一つであると考察する。

子どもの生活は日々新しい発見で溢れており様々な経験を経ていく過程で少しずつ身近ないのちを大切にする心が育まれていく。その様々な経験の一つとして原体験が挙げられる。原体験とは人の生き方や考え方に大きな影響を与える幼少期の体験のことであり、大人になってからの人格形成にも大きな影響を与える。そこで幼少期に玩具や遊具で遊ぶ経験とは別で子どもが原体験に触れられる環境を保育者が用意することで身近ないのちを大切にする心を育むことに繋がるのではないかと考えた。

以上のことから私は原体験の中でも主に子どもにとって身近ないのちであると考えられる動植物に関連する実践を行い、子どもが大人になっても身近ないのちを大切にできるようになるためにどのような原体験を経験することが重要であるかについて研究していきたい。

２．動機の背景

前節では身近ないのちを大切にする心を育むことの重要性についての動機を述べたが、これが一般的な問題であるのか背景を調べてみた。

まず、レイチェル・カーソンは『センス・オブ・ワンダー』[1)]において次のように述べている。

「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではない。

幼児教育の後の初等・中等・高等教育では生涯学習の基盤である様々な知識を得ることはできるがそれは五感（視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚）を使って直接経験をすることには及ばないということを指摘している。

では五感を使用する直接経験を多く経験することでどのような効果が表れるのか。このことついて亀山秀郎と嶋崎博嗣は『幼児の原体験と両親の子どもの遊びに対する養育態度との関連性』[2)]において体験活動の重要性についてこう述べている。[2)]

原体験は触・嗅・味の基本感覚を少なくとも 1 つでも含む体験であり，継続的に体験しないと忘れてしまう視・聴覚と違い，1 度でも体験すれば一生残る長期記憶になるものである。

一般的に触覚・嗅覚・味覚は五感の中でもあまり多くの情報が含まれていないと考えられているが、視覚と聴覚より長期に渡って記憶が残るため大人になった時の人格形成に影響を与える重要な感覚だということが指摘されている。

また山田卓三は『生物学からみた子育て』[3]において次のように述べている。

> 感性も、豊かな自然の中で育てば自然に身につくというものではありません。子どもの感性は、まわりの感性のある人々の影響を受けて育つものです。

例えば、道に花が咲いていても周りの人が花に注意を向ける働きかけをしない限り子どもは花を見ようともしないかもしれない。しかしここで保護者や保育者が花に注意を向け、摘んで水を張った花瓶に花をさす行動をしていけば子どもは花が生きているという意識が芽生え、植物を生き物として捉えられるようになる。このことから動機で述べたように「保育者や保護者の考え方が子どもの考え方に直接影響を与える場合がある」という考察の根拠となると言える。

さらに子どもの感性について五島は『「生きる力」を育成するための自然体験活動を重視した環境教育に関する一考察』[4]で次のように述べている。

> 自然体験活動を考える場合、子どもは視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚など五感をフルに使いながら、自然に親しみ、触れ合うことで、多様な気づきや発見をする。そして、自然の不思議さ、美しさ、偉大さ、怖さなどに気づいたり、感じたりすることによって、自らの感性を豊かにしてゆく。

子どもが空や星を見て綺麗だと思ったり動植物を大切ないのちとして捉えたりできるようになるということは感性が豊かになるということに繋がる。そして感性を豊かにするためにはやはり五感をフルに使用する

原体験が有効であり、そこで体験したこと・感じたことは全て大人になってからの感性にも繋がる。

しかし、近年の子ども達は原体験を経験する機会が減少している。その原因の一つとして橘田重男は『幼児期の原体験に関する一考察』[5)]の中でこのように述べている。

> 子どもの主体的な遊びには、まず自由に遊び回れる空間が必要である。（中略）次に夢中になれる時間が必要である。（中略）それに加えて体験を共有する仲間があって初めて本来の遊びとなる。

現代では外遊びにおいて「三間の減少」が問題となっている。三間の減少とは、遊ぶ空間・時間・仲間が減少していることである。まず、空間は都市化が進み公園や空き地などの身近な遊び場が減少していることが背景にある。次に習い事をする子どもが増えて、そもそも遊ぶ時間が確保できないことによって遊びの時間が減少している。そして、最後に仲間の減少の背景は、少子化が進み兄弟姉妹が減っていたり年齢が近い人が近所に住んでいなかったりすることである。また、空間・時間・仲間が減少することに加えてテレビゲームの普及などにより、遊びの形態は外遊びより室内遊びへと遊びの形態が移行してきているため、さらに原体験の機会が減ってきていると言える。

このような背景を踏まえ、本研究では原体験を取り入れた活動を実際に子どもに体験してもらう中で、幼少期の原体験がいかに子どもの感性において重要な役割を担っているのか明らかにしていく。

３．研究仮説

前項では原体験をたくさん経験することの重要性について述べ、現代の子どもの暮らしにおいて自然や生き物と触れ合うような原体験の機会が減少していることを明らかにした。

そこで本研究は、日常の保育において子どもが身近ないのちを大切にすることができる心を育むにはどのような保育をすればよいかについて研究していこうと思う。研究仮説は以下の通りである。

１．　幼児期に自然に触れる体験をたくさんさせることで、心が動いた原体験が増え、いのちを大切だと感じる心情を醸成することができる。

２．　日常の保育において保育者が植物に関する掲示物を工夫することで、子どもが自ら自然に興味を持つことができる。

３．　たんぽぽのドライフラワーを作る活動を行うことによって子どもの心が動き、自然がもつ面白さに気付くことができる。

植物を含めた自然の面白さが伝わるような保育教材を教材研究し、普段から行っている保育の中でそれらを用いることによって上記の研究仮説が合っているか調査できるようにしたいと考える。また、保育者を含めた周囲の大人の動植物に対する関わり方が幼児の動植物への接し方に影響を及ぼすということを第１章の動機で述べた。そこで教材開発して作った保育教材を用いて、周りの大人がどれだけ人的環境として機能しているかも同時に調査していく。

これらの背景をもとに保育活動の研究を進めていくことにする。

第２章　文献調査

前章では本研究の主題である身近ないのちを大切にする保育についての動機と背景、課題解決のための研究仮説について述べたが、本章では公立幼稚園における保育の拠り所となる幼稚園教育要領、先進的な取り組みをしている先行事例を調べ、研究の方向性を探りたい。

１.幼稚園教育要領[6)]における位置づけ

平成 30 年 3 月発行幼稚園教育要領において身近な自然物とのかかわりについては 5 領域のなかの「環境」に含まれる。その中のねらいで次のように述べられている。

（1）身近な環境に親しみ，自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
（2）身近な環境に自分から関わり，発見を楽しんだり，考えたりし，それを生活に取り入れようとする。

幼児を取り巻く環境には動植物や遊具、生活に必要な物などの様々な事象があり、幼児はこれらの環境に好奇心や探求心をもって主体的に関わり、自分の遊びや生活に取り入れていくことを通して発達していく。そのため保育者は幼児が身近な環境に親しみ、豊かな体験ができるような保育環境を意図的・計画的に構成することが重要である。また動機の背景でも述べた通り、現代では三間の減少等による自然に触れる機会の減少が大きな課題であるため、それが子どもの自然に対する考え方に影響を及ぼしている。

さらに内容の取扱い（３）の中に次のような記載がある。

（３）身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感しあうことなどを通して自分からかかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探求心などが養われるようにすること。

これは動植物に対する感動を伝え合ったり共有したりする相手がいてからこそ身近な事象に目を向けられるということが示されており、それは保育者や保護者、友達を初めとする子ども自身の身の回りの人とのかかわりから生命尊重の心が育まれると考えられる。

さらに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つ、「自然との関わり・生命尊重」には次のことが記載されている。

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にする気持ちをもって関わるようになる。

まず子どもは身近な自然に目を向けることが重要であるため、自分で動植物を育てる経験をしたり、その動植物の生死にかかわる出来事に遭遇したりする経験を重ねていくことでいのちの大切さを体感していく。そしてそれは大人になった時にも動植物などのいのちあるものを大切にしようと思える心をもてるような幼児期の自然に対する考え方の基礎となる部分である。

２.環境教育指導資料［幼稚園・小学校編］[7]における位置づけ

次に国立教育政策研究所教育課程研究センターの「環境教育指導資料［幼稚園・小学校編］」では環境教育として幼児期から育てたいこととして次のように述べられている。

（１） 自然に親しみ，自然を感じる心を育てる

子供は自然に触れて遊ぶ中で，その大きさ，不思議さや美しさを感じ，心を揺れ動かす。自然との関わりの中で生まれる体験こそが，子供が本来もっている環境に対する感性を磨いていくことにつながる。特に自然は多様であり，子供の発達や興味・関心等に応じて，多様な関わりをもつことができる。幼児期においては，自然の中で諸感覚を働かせることを通して，自然に身を置くことの心地よさを体感させ，自然を感じる心を育てることが大切である。

また同様の資料の「小学校における環境教育の推進」において小学校における環境教育のねらいの中に次のような記載がある。

① 環境に対する豊かな感受性の育成

自分自身を取り巻く全ての環境に関する事物・現象に対して，興味・関心をもち，意欲的に関わり，環境に対する豊かな感受性をもつことができる。

この２つを比べるとどちらも環境に触れることで自然を感じる心や環境に対する豊かな感受性の育成をねらいとしていることが分かる。また学童期までを見通してみると、幼児期の自然に関わる体験は学童期に自分を取り巻く環境に対して興味や関心をもつことに繋がると考える。例えば幼児期に泥遊びを経験した子どもが泥のドロドロしている性質を一度覚えると、学童期になって泥団子を初めて見た時に幼児期に泥に触れてこなかった子どもは単に作ることが楽しそうという部分で興味をもつと考えられるが、泥の感触を経験したことのある子どもはあのドロドロしていたものがどうやったら団子状に固まるのかという泥の性質に興味をもつと考えられる。このように幼児期は学童期の自然に対する興味・関心をもつ前段階であると分かる。

３．学問的背景

今度はいのちを大切にすることと自然と触れ合うことの関係性について学問的背景を述べる。

まず生き物のいのちを含め、自然を大切にすることについて福井広和は「保育実践に生かす保育内容「環境」」[8)]中で以下のように述べている。

> 自然の大きさや美しさ，不思議さに気づかせることで，自然を愛し，自然を大切にしていきたいと願う心を醸成します。小動物にふれあうなど，遊びの中に命が感じられるような自然を取り入れる仕組みを工夫したいものです。

このことから自然を愛し、自然を大切にしていきたいと願う心を育むためには自然の大きさや美しさに気付く経験を多くすることが重要であることが分かる。また、保育者の目線で考えると子どもが自然に触れられる環境を遊びの中で整えることが重要であり、特に本論文の主題にもあるいのちが感じられるような自然を取り入れる工夫をすることが求められている。

次にいのちを感じる環境への子どもの興味・関心と保育者の役割について「保育実践に生かす保育内容「環境」」において髙内正子は以下のように述べている。

> 子どもたちの新しい学びに共感を示し，話し合いながら，一緒に学びを認めていくことが，さらなる次の興味へとつながることでしょう。そのような，子どもたちの学びと発達に応じた環境を整えることが，保育者に課せられた役割だともいえます。

第１章で保育者のかかわり方もいのちを大切にする心を育むために必要な要因であると述べたが、そのことをより具体的に髙内は述べている。子どもが何かの生き物や植物に興味をもった時、その子どもの興味がなくなってしまう前に保育者が興味に沿った図鑑などを保育室に準備したり、興味を普段の保育に取り入れたりすることで保育者は子どもの興味をさらに広げる役割をしているようである。いのちについて学ぶ上で死生観は子どもにとって難しいからといって教えるのを避けるのではなく、子どもと一緒に考えていくということが重要であると考えた。

幼児の死生観の形成にどのような要因が関係しているかについて「幼児の死生観の形成に影響する要因に関する文献研究」[9]で緒方と西田は次のように述べている

> 幼児の死生観の形成には，≪認知発達の状況≫を基盤として，≪非現実的な死にさらされる生活環境≫，≪子どもへの死の伝え方≫，≪死を身近に感じる経験の有無≫，≪死の理解につながる教育的体験≫が外的な側面として影響することが考えられた。

図１のように幼児の死生観の形成は子ども自身の発達に加えて教育的体験や子どもへの死の伝え方等の周りの大人のかかわり方も関係している。また「死を身近に感じる経験」は子どもによって異なるため、経験の有無によって死生観の形成に差が出やすくなると考える。

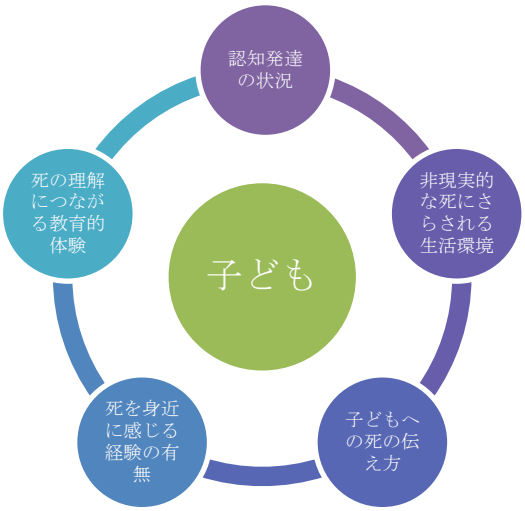


図１　子どもの死生観の形成のイメージ

学問的背景をまとめると、自然の中で身近ないのちを感じるためにはまず自然の美しさや不思議さに気付くことができる環境を保育者や周りの大人が整えることが重要であり、さらに子どもにおいては、遊びを通して自然に触れられる経験ができるようにすることが重要であることが分かる。そして子どもの興味に合わせてその興味が広がっていくように環境を整えたり援助したりすることで子どもの自然に対する学びが深化する。そのためには子どもの実態を正確に捉えて一人ひとりが何に興味を示しているのかを見極めることが求められる。また、子どもの死生観は子どもを中心として≪認知発達の状況≫や≪非現実的な死にさらされる生活環境≫などの様々な要因によって徐々に形成されていく。その中でも身近な人やペット（動物）の死を目の当たりにしたことがある人や身近に死を感じたことのある経験が無い人など、人によって死について今までどれだけのことを考えて理解できているのかは人によって異なるため個人差があると言える。このような個人差があることでクラス全体で「いのちを感じられる保育」を行うことが困難となっている。しかしいのちに対する考え方は大人になっても人によって異なるため子どもにとって保育所やこども園でいのちについて考える機会（保育）を設けることはむしろ様々な死生観の考え方があるということを学ぶ良いきっかけになるのではないかと考える。

ここまで学問的背景を追ってきたことで大人のかかわり方が子どもの死生観の形成において大きく影響を与えているということが分かった。そこで次節では、子どもの発達段階に合わせてどのように死生観が変化していくかや、アニミズムが形成されてから消失するまでの流れを調べることとする。

４．死生観の発達段階

ここでは発達段階に合わせた死生観の変化について調べる。まずは人間以外の生物を含む木や石など、すべての物の中に魂が宿っているという思想や信仰のことであるアニミズムの考え方がいつ発生し、消失するかについて小林勝年らは「幼児のアニミズムについて」[10]において次のような表にまとめている。

表１　物に付与される意識生物的概念の発達段階
（小林らの表をもとに冨岡が作成）

発達段階	年齢（歳）	特　　徴	観察された例
第１段階（小林）	4～6	すべての物に心があり，有用な物こそ生きていると考える。	・ろうそくは光を与える時だけ生きている ・石を投げる時，石は生きている
第２段階（小林）	6～9	すべて動く物にだけ，心があり，生きていると考える。	・雲，水，自転車は動くから生きている ・テーブル，山は動かないので生きていない
第３段階（小林）	8～12	すべて自分の力で動くものにだけ，心があり生きていると考える。	・自転車を走らせているのは私だから生きていない ・風は雨を動かすので生きていない
第４段階（小林）	11～	動物にだけ心があると考える。動物・植物のみ生きていると考える。	・太陽，月，風は感じることができないので生きていない ・植物，動物，人々，虫は感じることができるので生きている。

この表から４～６歳頃の子どもはすべての物に心があり、特に子どもにとって有用である物であるほど生きているという考え方であることが分かる。そのため４～６歳頃にはアニミズムが形成されており、個人差はあるが大抵の子どもはまだ生物と無生物の厳密な判断が困難であると考えられる。

０～３歳の子どもの死生観、アニミズムの形成段階、またその特徴については、小林の論文やその他の書籍にあたっても明確に表したものを見つけることができなかった。これらについては課題として実践の中で明らかにしていこうと考える。

認定こども園板橋向原幼稚園のホームページ[11]でアニミズムについて次のように記載している。

> 主観性が強い幼少期の思考の本質を示すもので、草木や太陽、風、靴などにもそれぞれ生命や感情が宿っていると思うことをいいます。むかいはら幼稚園では「お花さん」「お靴さん」など様々なものに、「くん、ちゃん、さん」をつけています。

この幼稚園では現象や物に自分の感情を重ね合わせることで、いのちの大切さや尊さを理解できようになるために「お花さん」「お靴さん」のように身の回りの物を擬人化して子どもに伝える保育を行っている。私は動物や植物等の生きているものに対してのアニミズム思考は子どもにとっていのちを大切にする心を育むために有用であると考えるが、「お靴さん」「机さん」等の実際にはいのちが宿っていない物に対してこのように擬人化して子どもに伝えることに対して疑問をもっている。なぜなら、大人のロールモデルである保育者が無生物を擬人化することにより子どもの生命概念の形成に混乱をもたらすと考えたからである。子どもが無生物を「お靴さん」と呼ぶことを否定する必要はないが、保育者はいのちあるものとないものの区別をしながら話すことが重要であると考える。

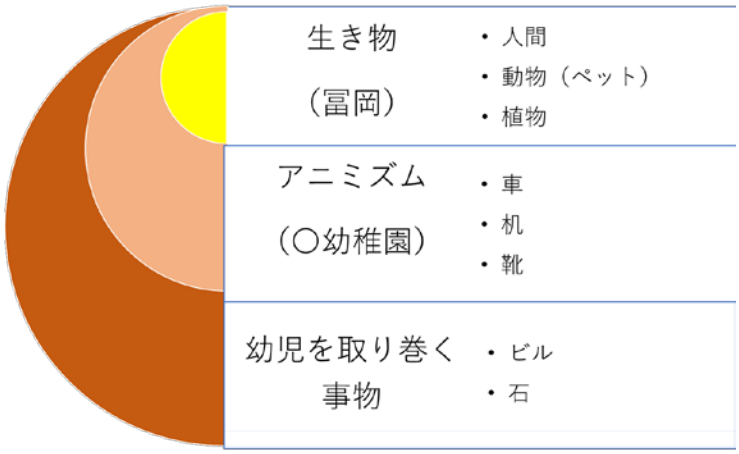


図２　〇幼稚園と冨岡のアニミズム思考の違いのイメージ

５．先行事例

命に関する保育に取り組む活動の実態を調査するため、園舎以外の自然の中で保育を行う「森のようちえん」のボランティアに参加した。

まず赤磐市や岡山市中区祇園周辺で活動している「しろいろ森のようちえん」のボランティアに参加させていただいた。この園の保育方針は「子どもを信じて見守る保育」「子ども中心の保育」「ノンプログラムプログラム」の３つであると伺った。通常の園では友達同士でトラブルが起きた時にお互いの気持ちを代弁したり解決方法を一緒に探したりするが、しろいろ森のようちえんでは子どもの気持ちを受け止め、その後は子ども同士で解決策を考えられるよう見守るという方針である。また、保育士は「だめ」「危ない」「汚い」「早く」の４つの言葉を使用しないよう心掛けていると伺い、自然体験活動を行っているとつい口に出してしまいそうな指示語を使用しないようにすることで子ども達が安心して自由に遊べていると感じた。

今回は赤磐市東軽部にある「ささいつばき園」という所で活動した。ここで参加した活動の中で原体験をしていると感じた場面が２つある。１つ目は以前収穫していた椿の種の殻を剥いて椿油を作る場面で、２つ目は自生しているアキグミの実を食べている場面である。いずれも触覚や味覚を使用した原体験ではあるが、調査対象であるいのちの大切さに関連する原体験ではなかった。また「ノンプログラムプログラム（事前に計画を立てた保育にしない)」という基本方針により、全員で一斉に何かの活動をするということが無いため、虫などの生物を見つけて遊ぶ場面は見られなかった。生物との偶発的な出会いをもとにしたいのちの大切さを実感させる保育の難しさを感じた。

後日、再度「しろいろ森のようちえん」でボランティアをさせていただいた。場所は前回とは異なり龍ノログリーンシャワーの森で、天気も晴れていたため、子どもと生き物とのかかわりを見ることができた。

ある５歳児の子どもが２匹の大きなカエルを捕まえて袋に入れた後、その袋に水を入れていた。森のようちえんでは朝の会で１冊絵本の読み聴かせを毎回行っているが、通常の園のようにいつでも絵本や図鑑を手に取って見ることができる環境ではないため、教師の声掛けからカエルは水の中を好むという習性を学んだのではないかと推察する。そこから絵本や図鑑で間接的に見るよりも、直接的に自然の中で本物の生き物のいのちを五感を使って体感したり学んだりすることの方が子どもの時に様々な生き物を触った時の感覚や、誤って握り潰してしまった時などの感覚を五感すべてで感じることができる。また将来、幼少期の実体験を基に成長するにつれていのちの大切さを学ぶことができると考えた。

このことは私が幼稚園教育実習を行った公立幼稚園でボランティアに参加した時の経験に重なる。４歳の幼児の中にカエルが２匹入った状態の虫かごにさらにバッタを入れたいと言う子どもがいた。しかしカエルはバッタを食べてしまうこともあるため、バッタをカエルの餌として同じ虫かごに入れるという目的でない限りはカエルを同じ虫かごに入れることは好ましくないとされている。そのことをまだ知らない幼児は同じ虫かごにカエルもバッタも入れたいと言って泣いた。

このことから子どもにとっていのちの大切さを教えられて頭で考えることよりも、直接生き物や植物等のいのちを体感することが重要であると分かる。五感の中の特に触覚・嗅覚・味覚を用いて生き物や植物と関わることで皮膚感覚で生理的嫌悪感を覚え、時間を掛けていのちの大切さを学んでいく。

次に本論文の研究仮説から図鑑や掲示物に関する保育の実践例として難波らの「共同製作で一つの世界を作り上げる実践例に基づいた一考察」[12]において子どもが図鑑を手作りする実践例があった。研究内容は4歳児クラスと5歳児クラスを対象に描きたい動物や虫、花などを決めて今までの体験からイメージを膨らませる。そして図鑑を作る活動の前に動物に関連した絵本を読むことで動物のイメージをさらに膨らませる。そこから画用紙に鉛筆で下書きをし、色鉛筆で着色していき、その周りをはさみで切って模造紙にまとめて貼るという実践であった。

この実践では、子どもが自分達の手で図鑑を作り上げることによってその後もより興味をもって図鑑を見るのではないかと考える。しかし、難波らの論文にある写真を見ると、子どもが色鉛筆で様々な色を用いて着色しているため、本物の生き物の外見とはかけ離れているものもあることが分かった。自分が思ったままの動物を自由に画用紙に描くという保育の考え方は良いと考えるが、本研究では子どもにも生き物の名前や生態が分かるようにすることも目的のひとつとしている。例えば子どもが池で何か生き物を捕まえた時にその名前を知っていると、会話の中で「カエルさん捕まえた」「カエルさんに餌をあげたい」など数多くいる生き物の中からその子どもにとって特別な存在として意味を持つことになる。名前を知らなければ、ただ「何かを捕まえた」で終わってしまいいのちを大切にする言動には至らないと考える。また、生態を知ることによってその生き物がどのような場所を好んでいるかや何の餌を食べるかなどを知り、子どもがいのちを大切にしたいという意欲が出ると考えるため生態を知ることも必要であると考える。そのため本研究で用いる掲示物は子どもに自由に作成させるのではなく、名前や生態が子どもに分かるように私が事前に作っておいた掲示物を用いることとする。

保育士くらぶ[13]のホームページでは年齢ごとに図鑑の選び方が記載されている。今回の私の保育実践は対象年齢を５歳児にして行う予定であるが、このホームページでは５歳児向けのおすすめの図鑑に関して以下のような特徴が書かれている。

> この時期の子供たちには、特定の分野について深く掘り下げた図鑑を使ってもらうのがいいでしょう。（中略）またこの時期は小学校への入学を間近に控えていますので、学び方を身に付ける目的で図鑑を使ってもらうのがおすすめです。図鑑を読んで知識を深めるプロセスは学び方の基礎になります。特に分からないことを自分で調べる力や、自分の興味の持ったことについて深堀していく力は学力を高めるうえで必要不可欠ですよね。

このホームページによると、図鑑は博物館型図鑑、テーマ図鑑、百科事典型図鑑の３種類に分けられるそうである。このうち博物館型図鑑は植物や動物など特定のジャンルについての情報を詳しくまとめた図鑑である。これに対し、テーマ図鑑はあらゆる視点から１番を決める図鑑や物の長さに注目した図鑑など特定のテーマに沿って情報がまとめられた図鑑である。百科事典型図鑑はあらゆる分野の情報を 50 音順など整理して並べた図鑑であり、テーマ型図鑑より網羅的に物事に触れることができる図鑑である。この３種類の図鑑のうち、５歳児には博物館型図鑑が適しているとこのホームページには書かれていて、先述したように子どもでも生き物の名前や生態が分かり、理解できるようにすることが重要であると考えているため、特定のジャンルに沿ってまとめる博物館型の図鑑に着目して作成しようと考える。今回は「植物」に着目するため、特定の「植物」についての情報を詳しく調べ、５歳児がよりその植物に興味を持ち、自ら自然に関わろうとするようになる掲示物を開発したいと考える。

次に実際に現場でどのような掲示物を用いて子どもが生き物に興味を示す工夫をしているかについてこども園や保育園、幼稚園を訪ねて先生方にお話を伺った。

まずは就実こども園５歳児担当の保育者の方に掲示物を見せていただき、お話を伺った。この保育者の方は「掲示物にイラストを用いるより実物の写真を用いることの方が多いが、実物の写真では分かりにくい部分をイラストで補っている」とお聞きした。例えば、図３のように背びれや尾びれなどの詳しい魚の体の部位は実物では伝わりにくいため分かりやすいイラストで示されている。また、図４ではこども園でメダカが卵を産んだため、そのことについて子どもが自ら調べ、オリジナルの掲示物を作っていた。そして掲示物の代わりにその季節に合わせた生き物に関する図鑑や絵本を置いておく時もあるそうだが、子どもがわざわざ絵本のコーナーから探して読むことはあまり無いため、本物の生き物や生き物に関する掲示物の近くに置かないと興味を持ちにくいとおっしゃっていた。

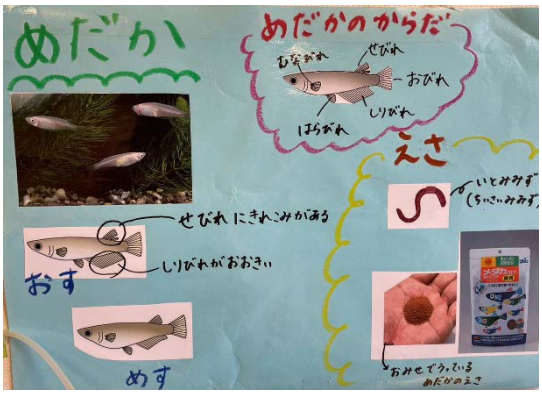


図３　イラストを使ったメダカについての掲示物

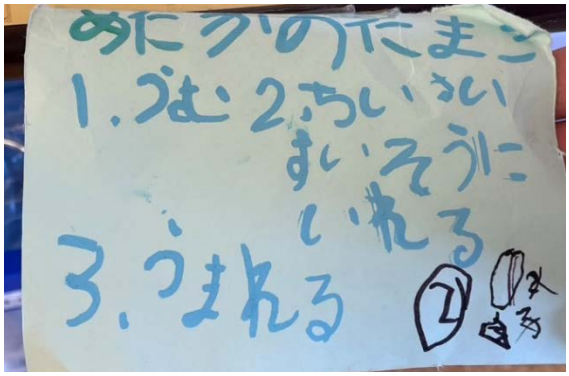


図４　子どもが作成したメダカの産卵に関する掲示物

図５　就実こども園の実物のダンゴムシについての掲示物

次に山陽学園短期大学付属幼稚園の保育者の方にお話を伺った。その先生のお話によると、掲示物は２パターンの使い方があるのではないかとおっしゃった。まず１つ目は子どもが不思議に思ったことや、もっと知りたいと思ったことに共感し、子どもの必要性に沿った環境として掲示物を作る使い方である。例えば、保育者が作った掲示物をただ保育室に掲示してもそれに興味を示す子どもは少ない。このような使用法では子どもにとって必要性が低い掲示物だと考える。逆に昨日捕まえた虫が今日の朝に死んでしまったのはなぜかと子どもが考えた時に、子どもが自分から調べたことを掲示物にすることで、他人が作った掲示物を見るより、掲示物を自分たちで作る過程も含めて、生き物に愛着が生まれるからこそ子どもの心に残るとお聞きした。

２つ目は保育者が作成した掲示物から子どもの興味を広げていくという使い方である。これは１つ目とは逆に生き物に興味を持たせることを目的とした手段の１つとしての有用性を持っているということである。具体的にはカブトムシに関する掲示物を保育者が作り、それを見た子どもがカブトムシが何を食べるのかが気になったり、幼虫を触ってみたいと思ったりする。そして、カブトムシの餌を調べてそれを掲示物に書き加えたり実際に幼虫を触ってみたりという経験に繋げることができるのではないかとおっしゃっていた。

そして、この２つの掲示物の有用性に共通することは将来の子どもの自発的な学びに繋がっているということであると伺った。子どもが知りたいと思ったことを自分から図鑑やインターネットで調べたり、他の子どもと協力して１つの掲示物を作り上げたりすることは小学生以降において「主体的・対話的で深い学び」や「アクティブラーニング」などの基礎になる部分に繋がるとおっしゃっていた。

さらに、保育者が作る掲示物としてどのようなものが子どもにとって有効であるかを尋ねると、保育者が子どもに何を知ってほしいかという意図を込めて掲示物を作成することが重要だとおっしゃった。例えば、鳴き声に特徴がある生き物の説明の部分に音符のマークをつけるだけで子どもは視覚的に鳴き声に意識が向いたり、形や色を知らせたい場合には実物の写真を、足の位置や体の構造を伝えたい場合には分かりやすいイラストを用いて作成したりするなど、目的を持たせることが大切であると伺った。そして平面で見るだけの掲示物では子どもの興味を引き出すことは不十分であるため、幼虫の写真を貼っておき、それをめくると成虫の写真が出てくるような仕掛けを作ったり、実際の虫を前に置いておくことで触って確かめることができる環境を整えたりすることで図６のように様々な感覚を使っていのちを体感することができるのではないかとお聞きした。

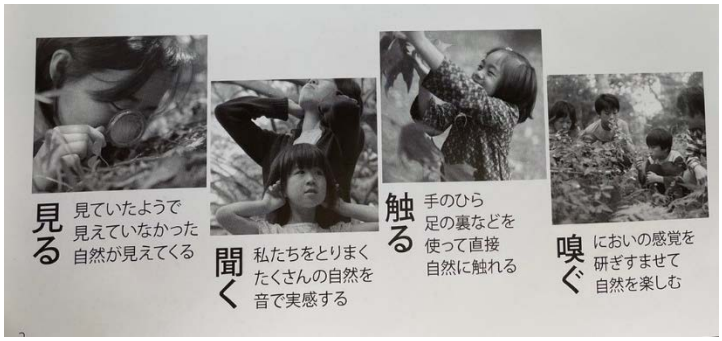


図６　ネイチャーゲームで重要視する感覚

また、その保育者の方のお子さんのエピソードにおいて捕まえたダンゴムシが死んでしまった経験からすぐに「水をあげなかったからだよ」と答えを与えてしまうのではなく、なんで死んでしまったのかを一緒に考えるような声掛けをすることで子どもの探求心を引き出すことができると伺った。その後ダンゴムシの遊園地を作ったら喜ぶのではないかと段ボールで遊園地を作ったそうであるが、この行動も否定するのではなく、子どもなりのいのちを大切にする方法であるのだと受け止めるという考え方が重要であると学んだ。

第３章　教材研究

前章では子どもの生き物のいのちに対する死生観の発達や幼稚園教育要領等で子どもと自然との関わりを調べた。生き物に関する掲示物に興味を持ち、実際に自然と関わる子どもの様子を見たり現場で働いている保育者の方にお話を伺ったりする中で、掲示物が子どもの生き物に対する興味を引き出すための物ではなく、掲示物を作る前後の過程や経験によって心が動くことで子どもはいのちに対する考え方を体感することができるということが分かった。本章では子どもがいのちを大切にする保育の構想を踏まえて教材研究に取り組むこととする。

１．いのちを大切にする保育の構想

いのちを大切にする保育の在り方について、図７のように構想した。

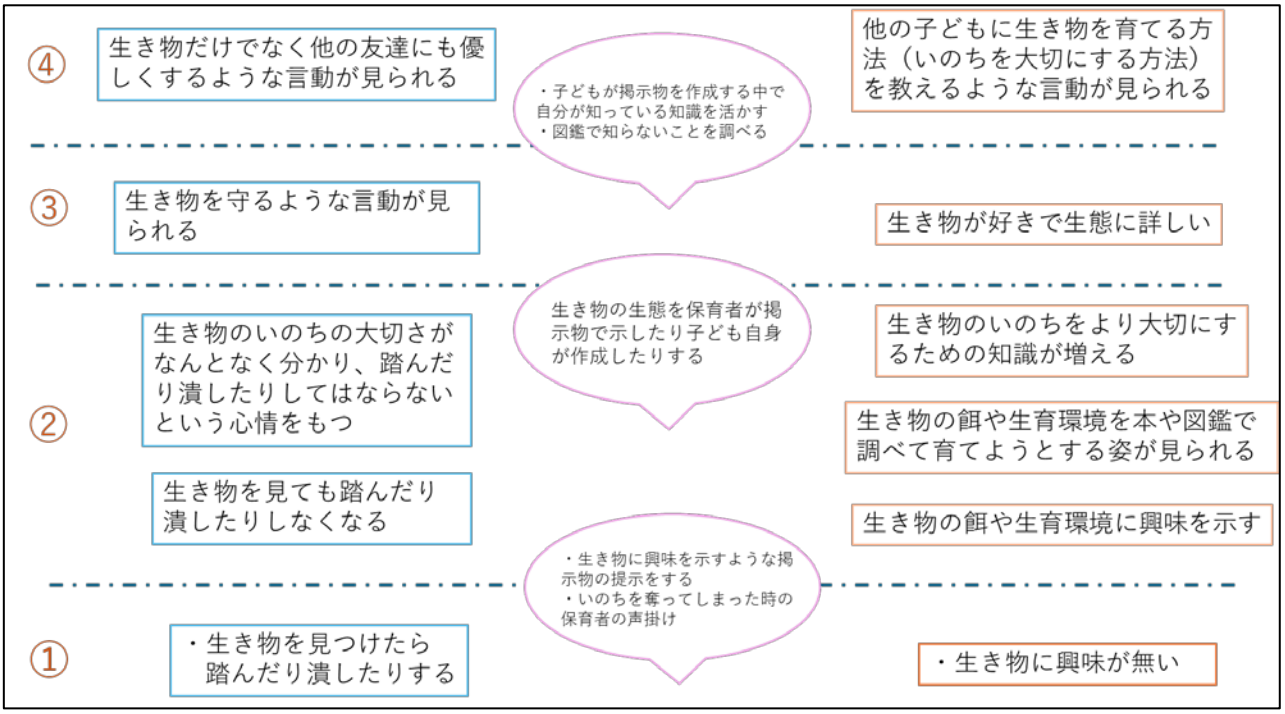


図７　いのちを大切にする保育の構想図

図７の左半分は、子どもが生き物と関わる時の心の在り方を４段階に分け、上になるほどいのちを大切にする心が育っていることを表した。最初は生き物を「恐怖」や「興味」の対象として捉え、踏んだり潰したりする段階にある。しかし、やがて生き物をむやみに踏まなくなったりいのちの大切さがなんとなく分かったりする心情になる。さらに③では生き物を守ったり、どうしたら長く生かすことができるかを考えたりするようになり、④では最終的に身近な虫だけでなく、他の友達にも優しくできるような言動が見られるような段階になることを想定している。

図の右半分は、主に子どもの生き物に関する知識や理解を深める過程を示しており、先程と同様に上に行くにつれて生き物のいのちの大切さを深く理解してくようになっている。まず生き物にそもそも興味が無い所から始まり、②では生き物の生態や環境に興味をもち、図鑑で調べたり保育者に聞いたりするようになる。その結果、③では生き物が好きで知識が豊富になる。そして④では最終的に他の子どもにも自分の知識や生き物の素晴らしさについて伝えられるようになると考えた。

では、それぞれの段階に保育者がどのような働きかけをすれば子どもの心情や知識を育むことができるのか。まず①から②へ移行するための働きかけとして、生き物に関する興味を惹く掲示物を配置したり子どもが生き物のいのちを奪ってしまった時などを取り上げて適切な声掛け（生き物の気持ちを代弁したり生き物のいのちを奪ってしまったことについて保育者が悲しいと伝えること）をしたりすることがあげられると考える。ここで言う掲示物では文字がまだ読めない子どもでも一目見れば分かるようにイラストや写真を多く用いて、図鑑に載っている生き物の特徴や生育環境を簡単な言葉に噛み砕くことで、難しさから掲示物に対する苦手意識が出ないようにすることが重要であると考える。

②から③へは、生き物の生態をより詳しく記載した掲示物を保育者が作成して掲示したり、子どもたちに図鑑や本で調べさせ、分かったことをまとめて自分達で掲示物を作ったりさせることで心情面・知識面ともにいのちを大切にしようという意識が高まるのではないかと考える。もともと生き物にそこまで興味が無い、あるいは生き物を踏んだり潰したりしてしまう子どもに対しては、大前提として①から②への過程を十分に経験させておくことが肝要ではないかと考える。

③から④へは、自分が生き物を好きになり、たくさんの知識を持てば友達に教えてあげたり、他の子どもと一緒に協同して掲示物を作ったりするようになるのではないかと考える。さらに虫や動物だけでなく身近な友達や保育者などにも優しく接するようになるなど、幼児期の終わりまでに育ってほしい「10 の姿」のすべての項目に繋がるのではないかと期待する。（図８）

実際にそのような子どもの資質・能力を伸ばすためにどのようなことをすれば良いかを次項で考えていく。

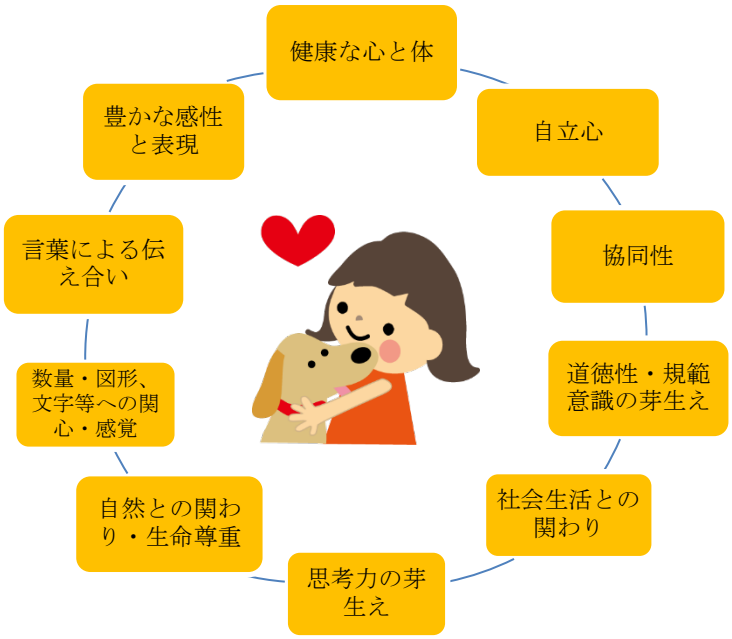


図８　幼児期の終わりまでに育ってほしい「10 の姿」

２．掲示物の試作

前項ではいのちを大切にする保育の構想について図にまとめることでどの段階の子どもにどのような働きかけをすることが有効であるかを可視化することができた。第２項では生き物に興味を示すきっかけとなるような掲示物を開発するために教材の試作をし、教材開発を行う。

（１）たんぽぽの掲示物

家庭画報.com[14)]のインターネットのサイトに、たんぽぽの花びらは花弁が 100 枚以上あるように見えるが、実は小さな花が 100～200 個集まって花形になっているため、花弁のように見える一つひとつが花でたんぽぽの花弁は５枚であると書かれている。子どもが自然に目を向けるきっかけとしてたんぽぽを題材として研究することとする。

〈材料〉黄色の画用紙（５枚）、緑色の画用紙（５枚）、両面テープ、布テープ、はさみ、スポンジシート（大２枚、小２枚）

〈作り方〉

① 黄色の画用紙を縦 26 ㎝横約 9 ㎝の花形に切り、これを６枚作る。

② 黄色の画用紙を縦 36 ㎝横 9 ㎝の花形に切り、これを 12 枚作る。

③ 花一つひとつに４本ずつ線を引く。

④ 対になる花びらを両面テープで留める。

⑤ 全て留めたら長さの長い方が外側、短い方が内側に来るように両面テープで留める。

⑥ 緑色の画用紙を半分に折り、葉っぱの形になるように切る。これを長さが短いものを 2 つ、長いものを 4 つ作る。

⑦ 茎の部分を長方形に切り、茎に葉っぱを貼り付ける。

⑧ 葉脈を表すために葉っぱに折り目をつける。

⑨ 花の部分と茎の部分を両面テープで留める。

⑩ 花の先端をギザギザに切る。

⑪ スポンジシート４枚を布テープで貼り付ける。

⑫ スポンジシートにたんぽぽの掲示物を貼り付ける。

〈工夫した点〉

・花の先端を５つに分け、線を引くことで花は５つの花びらが集まって１つの花になっていることを表すようにした点。

・葉脈を表すように折り目をつけることでより本物に近く、立体感を出すことができるようにした点。

・子どもが掲示物に興味をもったり、衝撃を受けて子どもの印象に残ったりしやすいようインパクトのある大きさになるように作った点。

・スポンジシートにたんぽぽの掲示物を貼り付けることで強度を強くし、半分に折りたためるようにした点。

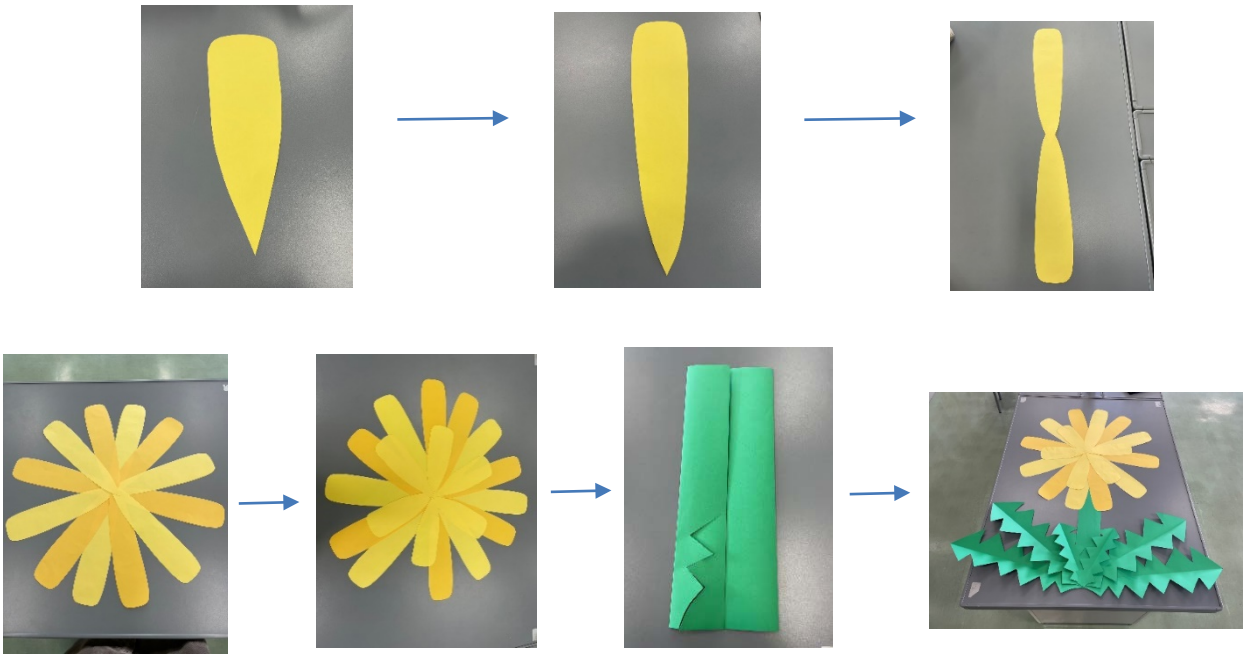


図９　たんぽぽの掲示物の製作過程

次に本研究では P21 ページの図 7 のいのちを大切にする保育の構想において特に①興味がない段階から②自然に興味をもつ段階へ移行することに焦点を当てて研究を行うこととする。子どもが主体的にたんぽぽを見に行きたいと思うような工夫を掲示物に施すためにクイズを用いることとし、教材開発を進める。

（２）クイズに関する教材研究

まず文字だけで理解することが難しい子どもたちにとって、どのように掲示物に興味を持ってもらうかが重要である。そのための重要なキーワードに「アフォーダンス」がある。「新版アフォーダンス」[15]では、

> アフォーダンスは「環境が動物に与え提供している意味や価値」

と定義している。また、「要点で学ぶデザインの法則 150」[16]では、

> 製品や環境に備わる物理的特徴のこと。
> それらは、その機能や使い方に影響を及ぼす。

と定義している。分かりやすい例で言うと、図 10 のように、ある 1 つのドアに取っ手がついていると、たとえそこに「PUSH」という表記があったとしても多くの人は無意識に一度はそのドアを引いてしまう。それを踏まえて、ドアの取っ手を取り除いて鉄版だけを取り付けると、たとえ「PUSH」と言う表記が無くてもドアを手前に引く人はいなくなるというものである。

このように本研究で用いる教材も子どもが無意識のうちに外にたんぽぽを見に行きたくなるような「アフォーダンス」を取り入れたものにしたいと考える。

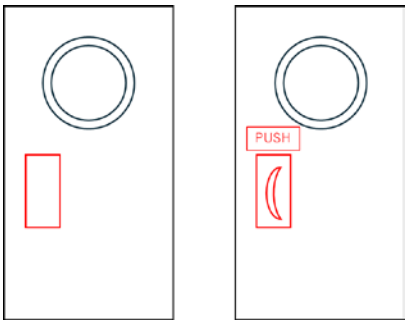


図 10　アフォーダンスの例
（佐々木の図を基に冨岡が作成）

実際にどのようにアフォーダンスを保育教材に取り入れるかを検討する。まず、前頁の内容を踏まえて子どもが自分から教材に興味を持ち、触ってみたいと思うような工夫を考える。

最初に花や茎、葉っぱの部分にクイズを隠してめくるとクイズが出てくる仕掛けを考えた。しかしこれは植物に元から興味がある子どもからすると興味を持って紙をめくることが想定されるが、興味が元から無い子どもにめくらせることはほとんどないのではないかと考えた。

そこで春に見られる虫であるテントウムシや蝶の形に切った画用紙にクイズを書いて掲示物のたんぽぽの周りに貼ろうと考えた。この場合アフォーダンスの考え方が取り入れられていないため、さらにテントウムシや蝶が飛び出ている仕掛けをすることにした。図 11 のように貼り付けたい虫に T 字に切った画用紙を貼り、上の部分をたんぽぽの掲示物の空いている所に布テープで貼り付けるようにすることで、図 11 のように虫が飛び出ているような立体感を作ることができた。虫の裏側にクイズを書いておくことで触ったり掲示物自体を揺らしたりした時に、揺れる虫を見て興味を持って触っているうちにクイズを見つけることができるのではないかと考えた。（図 12）揺れる場所が気になり裏側をめくってみたくなるというアフォーダンスを取り入れる工夫をした。

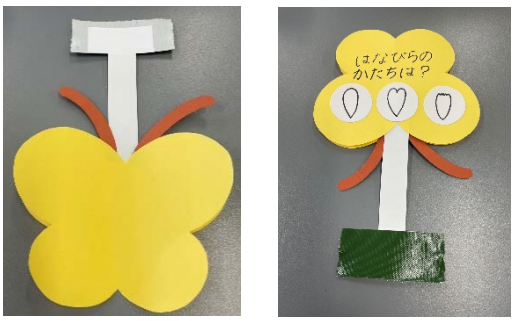


図 11　アフォーダンスを取り入れた蝶の写真

図 12　蝶をたんぽぽの掲示物に貼った写真

３．掲示物を活かした保育実践の検討

次に前項で教材開発を行った掲示物を活かした保育実践の方法について検討する。そこで科学実験データベースの「タンポポ綿毛のボトルフラワーを作ろう」[17]を基に本研究で行う保育実践を考える。

〈材料〉

たんぽぽ、ガラス瓶、乾燥剤（シリカゲル）、クリップ、布テープ、ボンド

図 13　たんぽぽのドライフラワー（乾燥前）

〈作り方〉

① 布テープに曲げたクリップを刺す。

② 瓶の蓋にクリップを貼る。

③ たんぽぽの茎とクリップの先端にボンドを少量つける。

④ たんぽぽの茎の中にクリップの先端を入れる。

⑤ シリカゲルを瓶の蓋に敷き詰める。

⑥ ボンドが乾いたら（花の重さで茎がまっすぐになるように）瓶を逆さにして１日～２日程置いておく。

実際に作ってみると工程が簡単であるため所要時間は５分程度で完成した。しかしこれを子どもが自分で作るとなると難しいと感じるポイントがいくつかあった。１つ目は瓶を使用しているため、作っている途中で瓶を落として、瓶が割れて怪我をしてしまう可能性があるため、安全性の面で工夫が必要であると考える。２つ目はクリップの先端をテープに刺して瓶の蓋に貼るため、こちらも安全性の観点から見ると指や目にクリップの先が刺さる恐れがあると予測する。

さらに今回は教材研究のため、綿毛だけでなく花が咲いている状態のたんぽぽを一緒に瓶に入れるとどうなるかを試した。私の予想では他の花をドライフラワーにした時と同様に花が咲いている状態のままドライフラワーができるのではないかと考えた。

しかし実際には図 14 のように 1 日経過したたんぽぽを見てみると右側の綿毛の方は最初よりも綿毛が広がっていることが分かる。逆に花が咲いていた左側の花を見ると花が萎れて花の、下から綿毛が少し見えている状態になった。

図 14　1 日経過したたんぽぽのドライフラワー

上手くドライフラワーにならなかった原因としては 2 つのことが考えられる。1 つ目はシリカゲルが古い物であったため、乾燥する力が弱かったのではないかということである。2 つ目は花が咲いている状態のたんぽぽと綿毛になる前のたんぽぽを一緒に瓶に入れたことで、花の水分量が多くなってしまったため、ドライフラワーになるほど乾燥しなかったのではないかということである。

上記の失敗した原因を踏まえ、2 回目は同様の瓶を用いて綿毛になる前のたんぽぽのみを瓶に入れ、シリカゲルを 1 袋追加して行った。

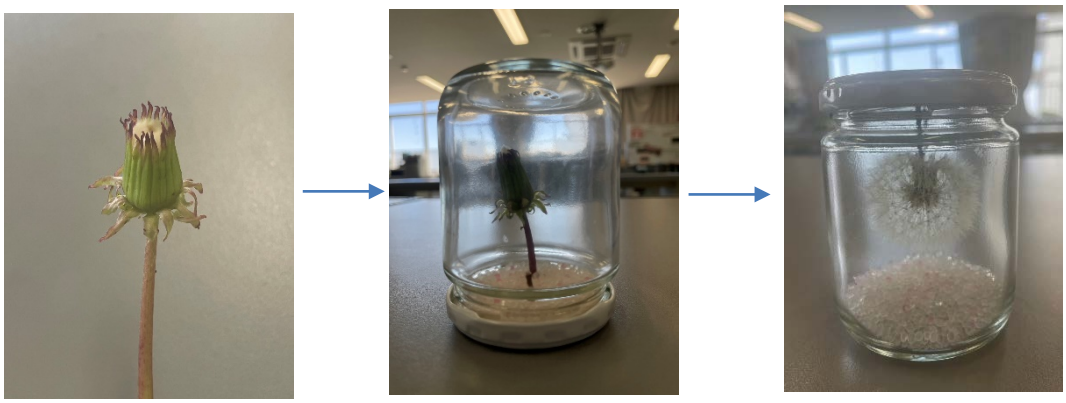


図 15　たんぽぽのドライフラワー（2 回目）

すると、図 15 のように球状に綿毛が広がった。

次は綿毛が開くまでの時間について研究していく。たんぽぽがドライフラワーになる仕組みとしては、シリカゲルが瓶の中の湿気を吸い取ると同時に花の水分も吸い取ることでドライフラワーになる。それがどのくらいの時間を掛けて乾燥するか、1 時間毎に写真を撮って確認する。

今回は、「recolo」というインターバルカメラを使用して調査を行う。これは撮影間隔を設定すると、その間隔で写真を自動で撮ってくれるものである。1 時間ごとに 1 枚写真が撮れるように設定し、たんぽぽの綿毛のドライフラワーが完成するまでの時間を調べた。図 16 は recolo を用いて綿毛がドライフラワーになるまでの経過を 4 時間ごとにまとめた図である。

図 16　綿毛がドライフラワーになるまでのインターバルカメラの写真

この２回目の試作をして分かったことが３つある。１つ目は綿毛の広がり方を見ると、ある程度時間が経ったら一気に広がるのではなく、時間を掛けて徐々に広がっていくということである。２つ目は綿毛が広がるまでに掛かる時間は 28 時間前後であるということである。そのため、保育実践を行う際はできれば午前中に行うことが望ましいと考えられる。３つ目は１回目の試作をした時の綿毛は、瓶を逆さにしても茎の部分が自立していたが、２回目の試作では１回目の試作で使用した瓶より細長い瓶を用いて、瓶の高さに合わせて長めに茎を切ったため、茎が弱く瓶を逆さにすると倒れてしまった。クリップが入っていない部分は茎が折れ曲がりやすくなっているため残しておく茎の長さを短めの４～５cm 程度にする方が良いと考えた。しかし子どもに４～５cm 程度と言っても伝わらないため、伝え方に工夫が必要であると考えた。

次に保育実践でドライフラワーの製作をする際、子どもがどこまで自分の力で作ることができるかについて考える。まず５歳児の実態について詳しく見るために山陽学園大学附属幼稚園でボランティアをさせていただくことにした。そこで５歳児の発達を見ると、まずクリップを曲げてガムテープに突き刺す工程では、子どもがクリップの先で指を怪我してしまう可能性があるため、クリップを曲げて蓋に布テープで貼る工程は事前にしておく必要があると考える。はさみは工作等で使用していて、ある程度使用できることが分かったため茎を切る工程は子どもが自分でできるようにする。ボンドは「ダンゴムシくらいの大きさ」と伝えることで出し過ぎを防ぎ、シリカゲルを入れる際には飛び散りを防止するためにシリカゲルの袋の口を小さめに切っておき、子どもが自分で入れられるようにしようと考える。

第４章　保育実践

１．　目的及び研究仮説

前章ではいのちを大切にする保育の構想に基づいてアフォーダンスの考え方を取り入れた掲示物と綿毛のドライフラワーの教材開発を行った。本章では保育実践を行い、開発した掲示物と綿毛のドライフラワーを作る活動が実際の保育の場に適切であるか調査・検討する。

最初に私がたんぽぽを保育教材として扱おうと考えた理由を述べる。たんぽぽには茎の中が空洞になっていることであったり、花びらの枚数は５枚で、たんぽぽはそれが束になってできている１つの花束であることであったりと、調べなければ知らなかったことが多くあった。様々な園でボランティアをしていく中で保育者が「面白い！」「不思議！」と思ったことは子どもにも伝えたいという話を聞いた。私自身たんぽぽの秘密やたんぽぽを用いた草花遊びを知っていく中で子どもがこれを知ったらどのような反応をするかが気になったため、保育教材として取り上げることにした。

保育実践のデータの残し方に関しては、幼児にアンケートを取るのは困難であるため、ビデオカメラやデジタルカメラを用いて映像や音声で子どもの反応やデータを集めることにする。掲示物ではアフォーダンスが活きているかを調査するため、全体で集まっている時に触れるのではなく、あえて普段の教室に置いておくだけにすることで、子どもが気付くか気付かないか、気付いた場合どのような反応を示すのかを確認したいと考える。

２．　調査方法と内容

今回保育実践で取り扱う内容は大きく２つある。１つ目はたんぽぽの掲示物を登園時に見えやすい場所に設置し、子どもがどのような反応をするかの調査である。２つ目は綿毛のドライフラワーについてである。

子どもの反応		
・掲示物に気付かない。 ・掲示物に気付いても興味が無く、素通りする。	・掲示物に気付くが近くに大人（保育者）がいなければ興味を持たない。 ・少し離れた場所から見るだけ。	・近くに大人（保育者）がいてもいなくても興味を持って近くでみたり触ってみたりする。 ・本物のたんぽぽを探しに行き、クイズの答えを確認しようとする。

図 17　予想される子どもの反応

掲示物を置いたときに予想される子どもの反応を図 17 のように３つに分類した。保育実践を実際に行う幼稚園でボランティアを約２週間させていただき、５歳児の普段の幼稚園での様子や発達、遊び方等を学ばせていただいた。その中でも特に植物と関わる様子に着目すると、保育者に「先生見て！」と言って綿毛を飛ばす様子を見せたり、花を摘んで「ママにプレゼントする」と言っている子どもの姿が見られたりと、植物へ興味を示している姿は女児に多く見られると感じた。さらに保育者がシロツメクサを指輪にして子どもと遊んでいる姿を真似して遊んでいる子どもの様子が見られ、これは保育者が人的環境として子どもの遊び方の幅を広げている例であると考える。

３．　保育実践

① 調査対象

岡山県Ｓ幼稚園５歳児すずらん組（22 人）

② 調査日時

令和６年６月６日（木）、７日（金）、12 日（水）

③ 調査方法

６月６日（木）

① 子どもの登園の時間に合わせて目に付きやすい教室の入り口にたんぽぽの掲示物を立て掛けてビデオカメラで子どもの反応を記録する。

② 降園前に綿毛が開く前のドライフラワーを子どもに見せ、次の日にどうなっているかが楽しみになるような声掛けをする。

６月７日（金）

① 前日と同様に掲示物を設置し、反応を記録する。

② テラスの机に綿毛のドライフラワーを置き、子どもがどれくらい興味を示しているかを記録する。

③ 弁当を食べた後、綿毛のドライフラワー作りをする。

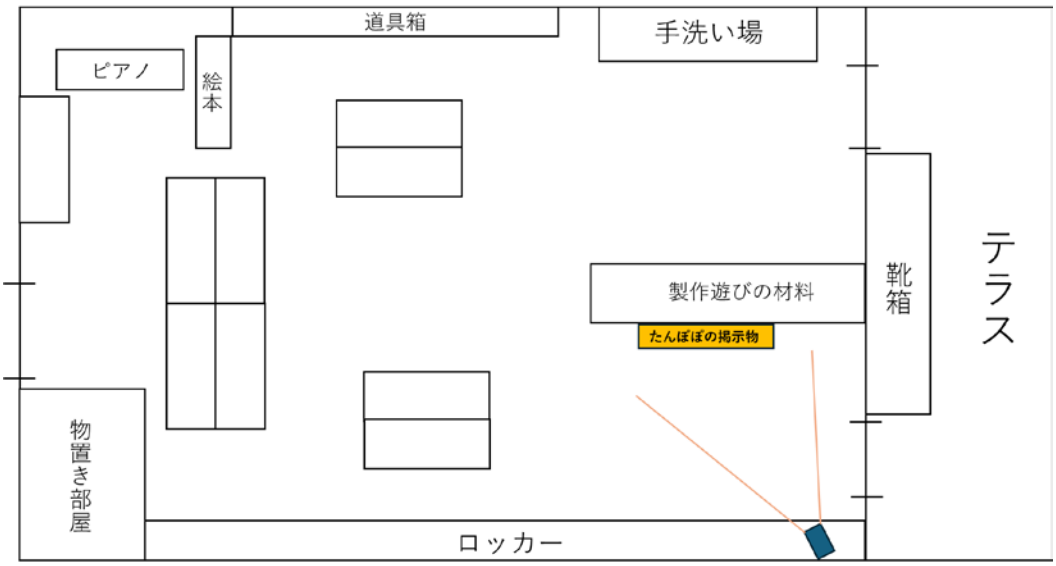
６月 12 日（水）

① できたドライフラワーを子どもに見せる。

子どもが摘んできたたんぽぽによっては綺麗に咲かないものもあるということが想定されるため、今回は子どもの「綺麗！」や「うわ～！」といった心の動きを大切にし、綿毛が上手く広がらなかった子どもの瓶は中身を後日差し替え、全員分が咲いた状態で成功体験として子どもにドライフラワーを見せようと考えている。

④ 保育実践の様子①〈6 月 6 日（木）〉

子どもの登園前に掲示物を立て掛けて登園してくる子どもがどれくらい気付くか、どのような反応をするかなどを、ビデオカメラを用いて調査する。環境構成は図 18 の通りである。



□・・・机　■・・・ビデオカメラ

図 18　教室の環境図（6 月 6 日）

ビデオカメラの記録から、子どもが掲示物に対して行った行動を、「興味が無い」「見る」「触る・めくる」「本物のたんぽぽを探しに行く」の 4 つのパターンに分けた。6 月 6 日（木）は 1 人欠席していて、合計 21 人を対象に調査を行った。加えて、実習生が 3 人いた。

表 2　たんぽぽの掲示物に対する子どもの反応

	子どもの数
興味が無い	13 人
見る	8 人
触る・めくる	4 人
本物のたんぽぽを探しに行く	1 人

調査結果は表 2 の通りである。「興味が無い」というジャンルには掲示物の前を通っても気付かない子どもや、目の前にあるにも関わらず見たり触ったりしない子どもも含まれている。

考察①

今回掲示物を作る上で重要であるとしてきた「アフォーダンス」の面で考えると、周りの大人（保育者）がかかわらなくても子どもが自ら掲示物に興味を持つのではないかと推測していた。しかし、実際は近くに保育者や実習生がいる方が掲示物に気付いた子どもの興味が広がっていっていることが分かった。図 19 のように子ども同士でたんぽぽについて話している子どももいたが、大半の場合が図 20 のように保育者や実習生と掲示物を介したやり取りをしていたため、周りの大人は人的環境としての影響が大きいということが分かる。また、図 20 の女児はこの掲示物を見つけた瞬間に「うわぁ！なにこれ！」と大きく驚いた反応をした。掲示物を作成する際子どもにとってインパクトがあるように大きく掲示物を作ったため、大きい掲示物を作ることは子どもの興味を掻き立てるために有効であると考える。

図 19　子ども同士で掲示物に関する話をしている場面

図 20　子どもが保育者と掲示物に関する話をしている場面

掲示物を「見た」と言う 8 人のうち、3 人は保育者や他の友達に「見てこれ～？」と尋ねたり、「たんぽぽって枯れたら何になるの～？」と質問をしたりして、掲示物を見た時の驚きやクイズを誰かに共有しようとする言動が見られた。この言動から、子どもが「面白い」や「綺麗」と思う『心の動き』を「誰かに伝えたい！」と言う気持ちから子どもの興味が広がるのだと感じた。

図 21 はある男児が園庭から本物のたんぽぽを摘んでたんぽぽの花びらが何枚あるかを確認している様子である。図 22 の写真のように一人でクイズの答えを考えている子どももいれば、保育者や他の友達と一緒に考えている子どももいて、掲示物に取り入れたクイズは子どもがたんぽぽに興味を持つ第一歩としてアフォーダンスとしての機能を果たしたのではないかと考察する。また、たんぽぽの花びらは何枚あるかというクイズに対して、私は子どもが外にたんぽぽを探しに行って数えるのではないかと予想していた。しかし、掲示物を触った 4 人の子どもの内 2 人は図 23 の写真のように指をさしながら掲示物の花の数を数えていて「18 枚！」と答えている姿が見られたため、掲示物に改善の余地があると考えられる。

その後降園前に少し時間を取っていただき掲示物のクイズについての答え合わせをした。「たんぽぽは枯れたら何になる？」という質問に対して大半の子どもが手を上げていたため、一斉に言ったところ、私は「綿毛になる」という答えを期待していたが、「茶色になる！」や「黒くなる！」など、子どもの答えはバラバラであったことが予想外であった。

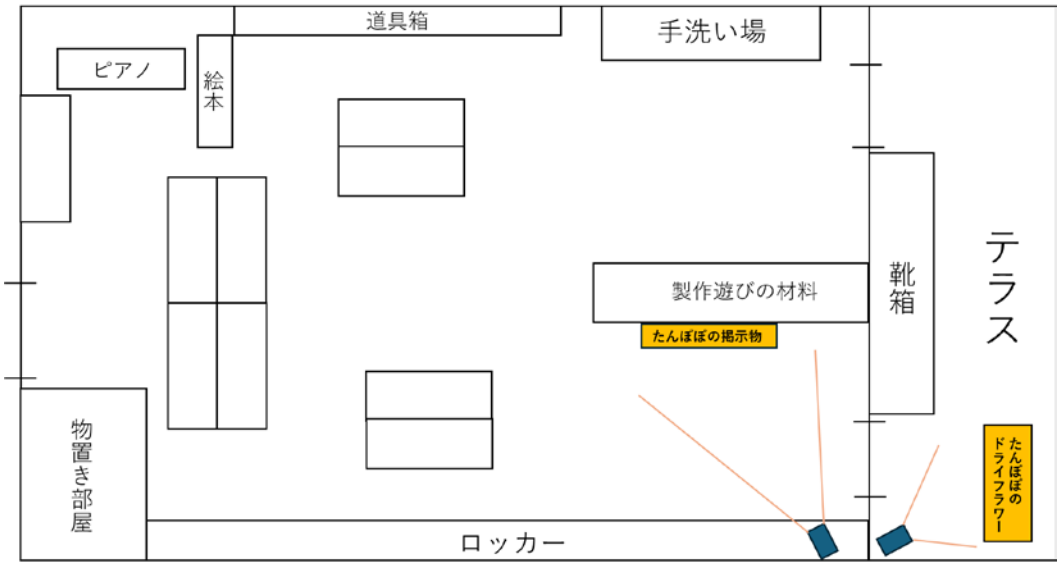
図 21　園庭からたんぽぽを摘んできた男児の様子

図 22　クイズの答えを考える女児の様子

図 23　掲示物の花びらの数を数える女児の様子

保育実践の様子②〈６月７日（金）〉

前日に綿毛が開く前のドライフラワーを子どもに見せたため、図 24 のように７日の朝は開いた状態のたんぽぽのドライフラワーを子どもの登園時に見やすい位置に４つ置いておき、ビデオカメラで子どもの反応を記録した。



□・・・机　■・・・ビデオカメラ

図 24　教室の環境図（６月７日）

図 25 のようにたんぽぽのドライフラワーを机の上に置き、子どもが瓶を振って綿毛が飛んだり瓶が割れたりすることを防ぐために紙に「さわらない」と書いておき、調査を行った。

図 25　たんぽぽのドライフラワーを設置した写真

６月７日（金）は22人全員が出席で、引き続き実習生が３人入っていた。今回は「ちらっと見る」、「立ったまま見る」、「しゃがんで見る」、「触る」の４項目に分けて表にまとめる。

表３　たんぽぽのドライフラワーに対する子どもの見方

	子どもの数
ちらっと見る	３人
立ったまま見る	４人
しゃがんで見る	８人
触る	３人

「ちらっと見る」という項目はたんぽぽのドライフラワーを見ている時間が１～３秒の子どもが含まれている。

考察②

前日（６月６日）に掲示物に興味を示していた子ども９人の内、１人は遅れて登園したため、その１人を除いて７人がたんぽぽのドライフラワーにも興味を示していた。そして前日に掲示物に興味を持っていなかったが、新たにドライフラワーには興味を持って見に来た子どもは８人いることが分かった。このことから、掲示物に興味を持っていた子どもは殆どの人がドライフラワーにも興味を持ち、掲示物に興味を持っていなかったがドライフラワーには興味を示した子どもは掲示物を用いるよりも、ドライフラワーのような実物を見て心が動く体験をすることが多いのではないかと考察する。

今回ドライフラワーに関する調査でも掲示物の調査と同様、図26のように保育者（実習生を含む）や他の友達に見せようとする言動が見られた子どもが５人いた。

図26　ドライフラワーを指さしてお母さんに見せている様子

この結果からもやはり子どもの興味が広がるためには周りの人との関わり（人的環境）が重要であると考えられる。

図 27　ドライフラワーを見つめる男児の様子

次に子どもはドライフラワーの何に興味を示しているかに着目する。前日に綿毛が開く前のドライフラワーを１つ子どもたちに見せていて７日は事前に私が作っておいたドライフラワーも合わせて４つ机に置いていた。そのため「綿毛が咲いてる！」や「(綿毛が）増えてるー！」といった発言が多く見られた。図 27 に写っている男児は前日の６日に掲示物が目の前にあるにも関わらず、製作遊びに夢中でたんぽぽの掲示物には興味を示していなかった。しかし７日の朝、登園してからすぐにドライフラワーがあることに気付き、最初は静かにじっと見ていた。しばらくすると実習生が来て、男児が実習生に「これ瓶の中にビーズ入れてるの？」と尋ねていた。また、シリカゲルの色が異なるドライフラワーを置いていたため、その色の違いについても触れていた。このことから男児はドライフラワーの見た目に関する興味ではなくなぜ綿毛が開いたのかや、シリカゲルそのものに興味を持っているのではないかと考えられる。

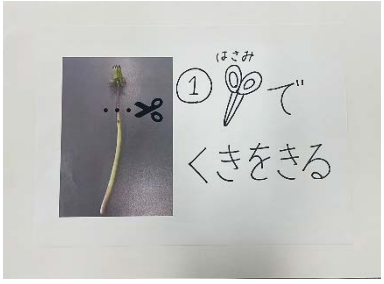
保育実践の様子③〈６月７日（金)〉（製作編）

次は実際に子どもがドライフラワーを製作した時の様子である。研究仮説の３つ目「たんぽぽのドライフラワーを作る活動を行うことによって子どもの心が動き、自然が持つ面白さに気付く。」を検証する。

活動の流れはまず、子どもに綿毛が開いた状態のドライフラワーを見せ、作るために必要なたんぽぽを園庭に取りに行く。次に教室に帰ってきてドライフラワーを作るという流れである。

たんぽぽのドライフラワーの作り方を伝える際、どのような手段で伝えると分かりやすいかを考える。ボランティアをしている時に折り紙の折り方の紙が机に置いてあると簡単な物であれば子どもはその紙を見ながら自分の力で折ることができていた。そのことから、視覚的に分かりやすくする方法が有効であると考えたため図 28 のような作り方の紙を準備した。

摘んでくるたんぽぽの例



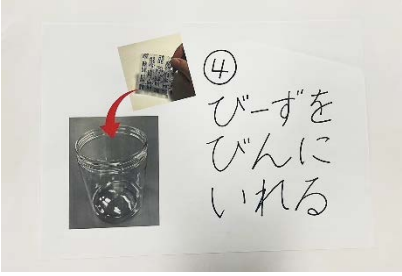


図 28　子どもに向けたドライフラワーの作り方の説明の紙

製作に興味が持てるよう、テラスに置いていたドライフラワーを子どもに見せ、「水やりもしていないのに何で綿毛が咲いたんだろうね？」と聞くと子どもから「太陽があたってこうなったじゃない？」という意見があった。その後インターバルカメラで撮った綿毛が開く様子をパソコンで見せ、「この綿毛のドライフラワーをみんなで作ってみようと思

図 29　ドライフラワーが作れると聞いて喜んでいる男児の様子

うんだけどどうかな？」と言うと子どもたちが「やったー！」や「え！作れるん！」といった喜んでいる反応が多く見られた。そしてたんぽぽをみんなで園庭に探しに行ったが、園庭に出たら遊具で遊ばないという約束を子どもたちとするのを忘れていたため、５人くらいの子どもが遊具で遊ぶ様子が見られた。（図 30）

図 30　たんぽぽを探す様子

製作時には瓶を選ぶのを楽しんでいたり、ビーズが瓶からこぼれないように慎重に入れたりする姿が見られた。たんぽぽの茎をはさみで切る際には長さを「みんなの小指くらいの長さ」と伝えたが、小指の長さでは少し短かった上、子どもから「先生これくらい？」と聞かれることが

多かったため、長さを示した紙を準備しておく方が子どもにとって分かりやすかったのではないかと考える。

図 31　ドライフラワーの製作の様子

図 31 は実際に子どもたちが綿毛のドライフラワーを製作している様子の写真である。導入としてインターバルカメラの映像を見た時やドライフラワーを作る過程で子どもたちがわくわくしながら笑顔で作る様子が多く見られた。一方で、作り方の説明を聞いている時や、シリカゲルをこぼさないように瓶に入れる時などでは、集中して真剣な表情で取り組んでいる一面も見られた。

考察③

インターバルカメラの映像を見せると図 31 にもあるように身を乗り出してパソコンを見ている子どもがほとんどであり、「わぁ～！」と言う声があがったり「どんどん上に上がってきてた！」「すごかったね！」と友達同士で話している姿が見られたりした。このことから研究仮説の３つ目である『たんぽぽのドライフラワーを作る活動を行うことによって子どもの心が動き、自然がもつ面白さに気付くことができる』と照らし合わせると、心が動き、綿毛が広がる面白さに気付いたと言える。

そして後日先生から聞いた話の中で図 32 の写真の手前に写っている女児は初めてする活動を「やらない」と言ってなかなかしようとしないことがあるという話を伺った。この女児は掲示物にもドライフラワーをテラスに並べていた時にも興味を示さなかったが、インターバルカメラの映像を見た時に周りの子どもたちと一緒に「うわぁ～！」と言っていた。その後も近くの先生に「長さはこのくらい？」などと質問しながら最後まで作っていた。このことから、この女児はインターバルカメラの映像を見たことによって心が動き、活動に興味がもてたのではないかと考察する。

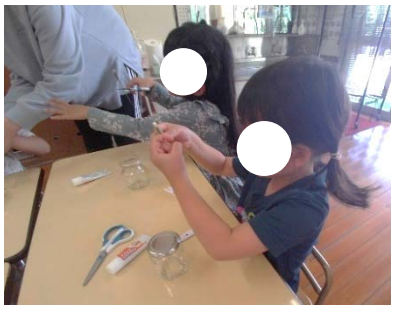


図 32　たんぽぽの茎を切る様子

図 33 は子どもたちが完成した瓶を持って下から覗き込んでいる時の写真である。私はこの時、他のグループの子どもに作り方を教えていたため、後からビデオカメラで音声を確認すると、一人の女児が「下から見ると綺麗だよ」と言って、他の子どもも真似をしながら「綺麗だね～」と言って隣のグループの友達にも伝えていた。やはり子どもは「綺麗！」や「すごい！」といったような心が動く場面で、周りの友達や大人などに「伝えたい！」や「共感してほしい！」という気持ちが芽生えるのではないかと考える。

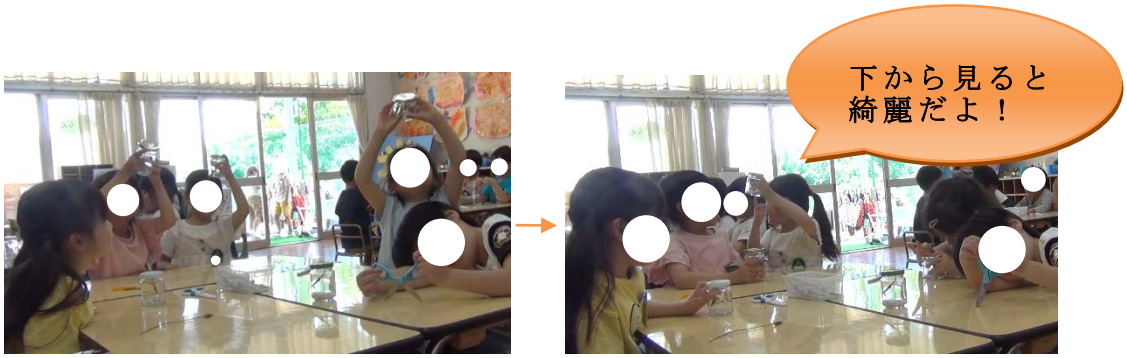


図 33　ドライフラワーを瓶の底から見ている様子

保育実践の様子④〈６月 12 日（水）〉

次は綿毛のドライフラワーが完成して子どもに見せる時の様子である。６月 10、11 日は全員分の綿毛がまだ開いておらず、見せることができなかった。しかし、幼稚園が２日休みだったにも関わらず、10 日（月）には「たんぽぽどうなったの？」と私に聞いてくれた子どもが２人いた。

図 34　ドライフラワーを瓶の底から見ている様子

12 日の朝、子どもが作ったドライフラワーを机に置いてその上に布を被せておいた。「みんなで何かを取りに行って、瓶にビーズを入れて作ったものがあったんだけど何だったか覚えているかな？」と尋ねると子どもたちから「覚えてるよ！たんぽぽでしょ？」や「どうなったの？」といった声があがり、期待している様子が見られた。全員で声を揃えて３つ数えた時に布をとると、子どもたちは「わー！咲いてる！」や「綿毛になってるー！」といった反応をしていたグループごとに見に来てもらうと、蓋に貼ってある名前を見て自分の瓶を探し、「俺（私）のやつあった！」と、嬉しそうに手に取ったり、真剣な顔で瓶を見つめている人がいたりと、クラスの全員が興味をもって見たり触ったりしていた。

考察④

自分たちでたんぽぽのドライフラワーを作るまでは私が作ったドライフラワーを見て、単に綺麗や不思議だという感想をもっていたと思うが、実際に「自分が作った」ドライフラワーを見ることでそれがより特別感のある経験になったのではないかと考える。また、たんぽぽを園庭に取りに行く過程では、たんぽぽを取りに行っている途中でバッタが跳んでいるのを見つけた子どもがいた。その子どもはバッタを捕まえようと追いかけていたため、たんぽぽを取りに行くことでたんぽぽ以外の自然に偶発的に出会うことができたのもこの活動の良さなのではないと考える。

図 35　バッタを探している子どもの写真

子どもたちが自分で作ったドライフラワーを持って帰ることができると伝えると、「えー！持って帰れるのー？」と喜んでいる姿が多く見られたため、子どもの中でたんぽぽのドライフラワーを作った経験が心に残ったのではないかと考えられる。1 週間後にまた幼稚園を訪れると、ある男児が「冨岡先生たんぽぽの瓶のやつありがとう」と言ってくれた。活動から約 2 週間経っても覚えていてくれたということはその子どもにとって楽しいと思える経験になったのではないかと考察する。

第５章　まとめ

私は第１章でも述べた通り、身近ないのちを大切にする心を育むためには幼少期にどのような経験をすることが大切であるかを中心に研究を進めてきた。研究を始める前は、いのちを大切にする心が育つためには幼少期の経験が大人になってから直接関係してくるのではないかと考えていたが、研究を進める中で、人生を長期的に見ると、幼少期の経験はいのちを大切に思う心を育てる基礎に過ぎないと気付いた。今回本論文では心が動く体験をして自然に興味をもつという、身近ないのちを感じることができるまでの初期段階に着目して保育実践を行った。いのちの尊さを幼少期に理解することは難しいということを研究を通して感じたが、自然遊びが減少し、デジタルゲームが普及している現代において少しでも多く保育者が自然に触れるきっかけを作ることで、豊かな感性をもつ子どもになってほしいと考える。

保育実践を通して子どもの笑顔をたくさん見ることができたとともに快く保育実践に協力してくださった幼稚園の先生方を見て、改めてこの職業の素晴らしさを知り、私自身より強く保育者になりたいと思うことができた。

今回の研究テーマである「身近ないのちを大切にする心を育む保育」は、私のこれからの保育者（教諭）生活で追求し続けるライフテーマである。虫や植物、動物などの「自然」という大きなまとまりだけでなく、友達や先生、家族などの身近にいる人のいのちの尊さに気付き、優しく人に接することができる心が芽生えるような幼少期の経験を保育者として追求していきたいと考える。

【引用・参考文献】

1）　亀山秀郎、嶋崎博嗣（2010）『幼児の原体験と両親の子どもの遊びに対する養育態度との関連性』p93

2）　レイチェル・カーソン（1965）,『センス・オブ・ワンダー』,新潮社 https://core.ac.uk/download/pdf/70294099.pdf（2023.5.25 閲覧）

3）　山田卓三（1993）『生物学からみた子育て』裳華房

4）　五島政一（2013）『「生きる力」を育成するための自然体験活動を重視した環境教育に関する一考察』

5）　橘田重男（2018）『幼児期の原体験に関する一考察』https://www.jstage.jst.go.jp

6）　幼稚園教育要領解説

7）　国立教育政策研究所教育課程研究センター『環境教育指導資料［幼稚園・小学校編］』p17.18.33

8）　『保育実践に生かす保育内容「環境」』（2023.8.2 閲覧）

9）　『幼児の死生観の形成に影響する要因に関する文献研究』https://core.ac.uk/download/pdf/235245024.pdf（2023.8.25 閲覧）

10）『幼児のアニミズムについて』file:///C:/Users/s5121046ma/Downloads/bcestu2_11(1).pdf（2023.10.5 閲覧）

11）『板橋向原幼稚園のホームページ』むかいはら幼稚園について - 幼稚園サイト（mukaihara.ed.jp）（2023.10.17 閲覧）

12）『共同製作で一つの世界を作り上げる実践例に基づいた一考察』

https://junshin.repo.nii.ac.jp/records/135

（2023.12.18 閲覧）

13）『保育士くらぶ』

https://www.hoikujyouhou.com/hoiku_club/33953

（2023.12.21 閲覧）

14）『家庭画報.com』（2024.4.16 閲覧）

https://www.kateigaho.com/article/detail/34815#:~:text=%E3%82%BF%E3%83%B3%E3%83%9D%E3%83%9D%E3%82%92%E8%A6%8B%E3%82%8B%E3%81%A8%E8%8A%B1%E5%BC%81,%E8%A6%B3%E5%AF%9F%E3%81%97%E3%81%A6%E3%81%BF%E3%81%A6%E3%81%8F%E3%81%A0%E3%81%95%E3%81%84%E3%80%82

15）佐々木正人（2015）『新版アフォーダンス』岩波書店 p60

16）ウィリアム・リドウェル、クリティナ・ホールデン、ジル・バドラー『要点で学ぶデザインの法則 150』p22

17）『科学実験データベース』（2024.5.14 閲覧）

https://proto-ex.com/data/675.html